

第29回

南方熊楠賞

記者会見資料

田辺市・南方熊楠顕彰会

〔目 次〕

南方熊楠賞について -----	1
南方熊楠賞運営協議会名簿 -----	2
南方熊楠賞選考委員会委員名簿 -----	2
第 29 回南方熊楠賞（自然科学の部）選考報告 -----	3
// 受賞者略歴 -----	5
// 受賞者コメント -----	6
トロフィー制作者略歴 -----	7
授賞式及び記念パーティー等について -----	8
歴代受賞者一覧 -----	9

南方熊楠賞について

南方熊楠翁は 1867 年 5 月 18 日（慶応 3 年 4 月 15 日）和歌山市に生まれ、幼時より天才の名をほしいままにし、東京大学予備門（現東京大学）に入学、2 年後退学渡航、米国各地を彷徨、高等植物から菌類・地衣類まで、さまざまな植物を採集、後英国に渡り大英博物館に迎えられ、「ネイチャー」「ノーツ・アンド・クエリーズ」に多くの論考を発表、その学識の深さは古今東西にわたり碩学の名をほしいままにする。

1900（明治 33）年帰国、1904（明治 37）年より田辺に居を定め、雑誌・新聞への投稿、変形菌（粘菌）・菌類を主とした植物の研究に没頭するとともに、エコロギー（エコロジー＝生態学）という言葉を使い、明治政府が推進した神社合祀に反対するなど自然保護に尽力した。

民俗学分野では、日本民俗学の父といわれた柳田国男氏をして「日本人の可能性の極限」と言わしめ、その学殖の豊かさから、様々な質問を受け、回答したものが往復書簡集として発行されている。

植物学分野では、新種の変形菌を多数発見し、自宅の柿の木で発見した新属新種の変形菌（粘菌）は、ミナカタの名を冠せられた。また、高等植物、コケ類、地衣類、藻類、菌類、変形菌類合わせて 3 万点以上の標本を残した。

1929（昭和 4）年、昭和天皇を神島に迎え進講、1941（昭和 16）年永眠した。

田辺市と南方熊楠邸保存顕彰会（現：南方熊楠顕彰会）では、翁没後 50 周年記念事業を計画、種々様々な顕彰事業を実施した。

1990（平成 2）年 10 月 20 日、南方熊楠翁没後 50 周年記念式典を開催し、市民の誇りとして翁の偉業を称え「南方熊楠賞」を制定した。

この賞は、国内外を問わず翁の研究対象であった民俗学的分野、博物学的分野の研究に顕著な業績のあった研究者に贈り、また特別賞として翁の研究に顕著な業績のあった研究者に、それぞれ賞状（線崎稲村氏揮毫）及びトロフィー（故 建畠覚造氏制作）並びに副賞（本賞 100 万円、特別賞 50 万円）を贈るものである。

表彰は、例年、年一研究者とし、人文部門、自然科学部門から交互に選考をするものであるが、本年は、自然科学部門よりの受賞者選考となった。

第 29 回南方熊楠賞の受賞者選考については、選考委員会において慎重に審議、選考し、南方熊楠賞運営協議会において受賞者が「馬渡駿介氏」に決定した。

南方熊楠賞運営協議会名簿

会 長 真砂 充敏 田辺市長 南方熊楠顕彰会々長

副会長 曾我部 大剛 南方熊楠顕彰館々長

監 事 武部 真明 朝日新聞和歌山総局長

監 事 弓場 和夫 田辺市教育委員会教育次長

南方熊楠賞選考委員会委員名簿

【自然科学の部】

選考委員長 堀越 孝雄 広島大学名誉教授

選考委員 藤田 敏彦 国立科学博物館動物研究部
海生無脊椎動物研究グループ長

選考委員 鷺谷 いづみ 中央大学教授

選考委員 黒沢 大陸 朝日新聞大阪本社科学医療部長

馬渡駿介氏は、1974 年に北海道大学大学院理学研究科博士課程を修了し、理学博士の学位を取得後、日本大学医学部の助手、講師を経て、1982 年に北海道大学理学部の助教授、その後、教授、同大学理学研究科教授、同大学総合博物館館長などを歴任し、2010 年に定年退職され、現在北海道大学名誉教授である。1969 年大学院修士課程に進学後現在に至るまでの 50 年間、一貫して無脊椎動物の種分類学に関する研究に邁進してこられた。氏が最も力を注いだ研究は、苔虫動物門に属し淡水から海水に生息する、コケムシと呼ばれる群体性の固着生物に関するものであり、多くの新種を含む日本産コケムシ類の種類相を明らかにした。特に、ヒラハコケムシの卵割から群体の形成、群体の季節消長を詳細に記載し、その内容は、氏の博士論文の骨格となった。さらに、世界中のコケムシ標本との比較研究も行い、いくつかの科・属・種についての分類体系に改訂を加えた。苔虫動物に加えて、大学院生と共同で、刺胞、紐形、環形、線形、動物、および節足の合計 7 つの動物門にわたり、いくつかの新属と多くの新種を含む記載論文を発表した。このように広範な動物門にわたる記載論文を発表した分類学者はこれまで他に例を見ない。

氏は、明治 12 年に来日した外国人教師ルートウィヒ・デーデルラインが収集し、母国ドイツに持ち帰った日本産動物標本を十数人の分類学者の協力を得て調査し、多数のタイプ標本と 3,000 種以上からなる 130 年前の日本の無脊椎動物相を明らかにした。この調査は、同時に、時間と国境を越えた学術交流に繋がった。

氏の研究成果は、130 報あまりの欧文原著論文に著わされており、これらの業績により、2002 年に日本動物学会賞、2004 年に日本動物分類学会賞を受賞した。この間、氏は多くの学生・大学院生を指導し、無脊椎動物分類学の後継者を育成した。また、多くの優れた分類学関係の著書、翻訳書、総説・解説、図鑑等を監修・編集・執筆され、分類学の普及と振興にも貢献した。

動物界の分類形質の多様性を反映して、動物分類学者はそれぞれ 9 つの分類群別の学会に分かれて活動している。氏は、分類学に基礎を置いた生物多様性の解明や分類学の地位向上の必要性を痛感し、有志と共に分類群別学会の統合に尽力した。

その結果、2000年には「日本動物分類学関連学会連合」が、2002年にはついに植物学関係学会とも統合した「日本分類学会連合」が発足した。氏は、日本動物分類学会会長、日本動物学会の評議員、国際動物命名規約委員会委員などを歴任し、国の内外で分類学の発展に貢献した。

氏は、2011年の東日本大震災により自然史関係標本が失われたことに危機感を抱き、定年退職後、日本学術会議、各種のシンポジウム、雑誌などを通じて自然史関係標本の重要性を訴える活動を続け、有志と共に2016年「一般社団法人国立沖縄自然史博物館設立準備委員会」を立ち上げ、現在理事として精力的に活動している。

今日分子系統学的手法が主流の分類学界において、広範な無脊椎動物についてフィールドにおける丹念な調査・研究に基づき種を記載・分類するという馬渡駿介氏の姿勢、さらに、自然史科学研究の一層の発展のために自然史博物館の設立を目指す活動などは、熊楠翁の精神に通じるものであり、同氏を第29回南方熊楠賞受賞者として選考した。

第 29 回南方熊楠賞受賞者

フリガナ	マワタリ シュンスケ
氏 名	馬渡 駿介
生年月日	1946 (昭和 21) 年 10 月 6 日
略 歴	<p>学 歴</p> <p>1969 年 3 月 北海道大学理学部生物学科卒業</p> <p>1971 年 3 月 北海道大学大学院理学研究科動物学専攻修士課程修了</p> <p>1974 年 3 月 北海道大学大学院理学研究科動物学専攻博士課程修了 理学博士取得</p> <p>職 歴</p> <p>1975 年 4 月 日本大学医学部 助手</p> <p>1980 年 11 月 日本大学医学部 講師</p> <p>1982 年 4 月 北海道大学理学部 助教授</p> <p>1988 年 4 月 北海道大学理学部 教授</p> <p>2007 年 4 月 北海道大学総合博物館館長</p> <p>2010 年 3 月 北海道大学定年退職 北海道大学名誉教授 現在に至る</p>
学 位	理学博士
受 賞 歴	<p>2002 年 日本動物学会賞</p> <p>2004 年 日本動物分類学会賞</p> <p>2007 年 Zoological Science Award (日本動物学会論文賞)</p>
研究活動	<p>1969 年大学院修士課程進学後現在に至るまで、一貫して無脊椎動物の分類学に関する研究を行ってきた。特に、苔虫動物門コケムシ類では、多くの新種を含む日本産の種類相を明らかにする他、世界中の標本との比較研究を行い、いくつかの科・属についての分類体系に改訂を加えた。</p> <p>苔虫動物に加えて、大学院生と共同で、刺胞、紐形、環形、線形、動物、および節足の合計 7 つの動物門にわたり、いくつかの新属と多くの新種を含む記載論文を発表した。</p> <p>標本調査にも奔走し、明治時代にドイツ人が収集して持ち帰った標本を十数人の分類学者と共に調査し、多数のタイプ標本と 3,000 種以上からなる 130 年前の日本の動物相を明らかにした。</p> <p>日本動物分類学会会長、日本動物学会評議員、国際動物命名規約委員会委員などを歴任し、日本分類学会連合の発足に尽力した。</p> <p>現在、国立自然史博物館を日本で初めて設立するための調査・研究活動を行っている。</p>
主要著書	<p>単著書</p> <p>馬渡峻輔 (1994) 『動物分類学の論理—多様性を認識する方法』東京大学出版会, pp.1-233.</p> <p>馬渡峻輔 (2006) 『動物分類学 30 講』朝倉書店, pp.1-178.</p> <p>馬渡峻輔 (2013) 『動物の多様性 30 講』朝倉書店, pp.1-183.</p> <p>共著書・編著書</p> <p>馬渡峻輔他 (1988) 『無脊椎動物の発生 下巻』培風館, pp.1-583. (担当:触手動物)</p> <p>岩槻邦男・馬渡峻輔共編 (1996 ~ 2008) 『バイオディバーシティ・シリーズ、全 7 巻』、裳華房、東京</p> <p>文部科学省国立天文台編 (2002 ~ 2019) 『理科年表』丸善, pp.1-984. (生物部分担執筆)</p>

第 29 回南方熊楠賞受賞コメント

馬渡 駿介

巨人の名を冠した賞を、足下にも及ばない私がいただくことの責任の重さを痛感しながら、おこがましくも、巨人南方熊楠と凡人私との共通点を三つあげさせていただきます。一つ目はロンドン自然史博物館でしばらく仕事をしたことです。雑務皆無の中、サウスケンジントン駅前で毎日紅茶とターキーサンドイッチを昼食用に求め、時に熊楠翁に思いをはせながら、論文をいくつか書くことができたのは幸せでした。二つ目は、分類学を専攻したことです。熊楠翁は主に粘菌、私は無脊椎動物と研究対象こそ異なれ、成果は雲泥の差だとしても、巨人と同じ分類学に親しんだことは私の誇りです。三番目は、社会への働きかけです。熊楠翁は自然保護を社会に働きかけ、その成果は鎮守の森の存続、神島の天然記念物指定などにつながりました。私は現在、国立自然史博物館を日本で初めて設立する活動に加わっています。設立された暁には分類学を含む自然史科学の振興がなされ、結果として熊楠翁にあやかり、自然が守られ、人類の持続可能性が高まることを願っております。

南方熊楠賞トロフィー制作者

故 建畠覚造（たてはた かくぞう）

略 歴

1919（大正 8）年 4.22 ～ 2006（平成 18） 2.16 彫刻家。東京生まれ。抽象彫刻のパイオニアの一人。

行動美術協会会員。

1941（昭和 16）年東京美術学校彫刻科卒業。第 4 回文展で特選。1950 年行動美術協会に彫刻部を創設、会員となる。1954 年ベネチアの第 1 回国際造型美術家会議に出席し、フランスに滞在。日本国際美術展、現代日本美術展、集団現代彫刻展、宇部現代日本彫刻展、1966 年ロダン美術館の国際現代彫刻展、1967 年アントワープ国際彫刻ビエンナーレ展などに出品、抽象彫刻の展開に重要な役割を果たした。

父、建畠大夢（和歌山県有田郡清水町出身、1880（明治 13）年 2.29 ～ 1942（昭和 17）年 3.22、本名 弥一郎）は著名な彫刻家であり、帝展審査員を務め、東京美術学校教授、官展系の代表的彫刻家として活躍した。

賞

- 1941（昭和 16）年 文展特選
- 1941（昭和 16）年～ 1942（昭和 17） 直土会賞
- 1943（昭和 18）年 野間賞
- 1966（昭和 41）年 国立近代美術館賞
- 1967（昭和 42）年 高村光太郎賞
- 1981（昭和 56）年 中原悌二郎賞
- 1982（昭和 57）年 長野市野外彫刻賞（美ヶ原）
和歌山県文化賞
- 1983（昭和 58）年 ヘンリームーア大賞展特別優秀賞
- 1990（平成 2）年 第 40 回芸術選奨文部大臣賞
- 2015（平成 17）年 文化功労者

作 品

和歌山県立近代美術館、箱根彫刻の森美術館、美ヶ原高原美術館、長野市野外彫刻、東京芸術大学資料館、和歌山県国体モニュメント、東京銀行本店モニュメント、和歌山県立近代美術館モニュメント、紀南文化会館モニュメント、さいたま博シンボルタワー、東京証券取引所研修センターモニュメント、長野市制 100 周年記念モニュメント、東京芸術劇場モニュメント、東京都新庁舎議会棟ロビー彫刻、東京都中央海浜公園モニュメント、和歌山市制 100 周年記念モニュメント

第 29 回南方熊楠賞授賞式

日 程 平成 31 年 5 月 11 日（土）午後 1 時 30 分より

会 場 紀南文化会館 小ホール

定 員 200 名

1. 授賞式

2. 記念講演

演 題 『ヒトの目にとまらない生き物たち』

講 師 第 29 回南方熊楠賞受賞者 馬渡 駿介 氏

南方熊楠賞受賞記念パーティー

日 程 平成 31 年 5 月 11 日（土）午後 4 時 30 分より（予定）

会 場 南方熊楠顕彰館

定 員 60 名

会 費 3,000 円（要申込み）

※授賞式、記念パーティーにご参加ご希望の方は、事務局までお申込みください。

後日入場チケットをお渡しいたします。

なお、定員になり次第締め切りますので予めご了承ください。

○お申し込み先 南方熊楠顕彰会事務局

〒 646-0035

和歌山県田辺市中屋敷町 36 番地 南方熊楠顕彰館内

Tel : 0739-26-9909 Fax : 0739-26-9913

E-mail minakata@mb.aikis.or.jp

歴代南方熊楠賞受賞者一覧

第1回南方熊楠賞（人文の部）

バーバラ・ルーシュ 氏

日本中世の主要な問題点を再検討し、日本文化を創造した人々の活動を実証的に新たな視角から解明した。

第1回南方熊楠賞（自然科学の部）

神谷 宣郎 氏

戦前、日本では細胞を生きたまま扱うことがほとんどできなかった時代に、粘菌を活用し、極めて独創的な方法で原形質流動の分子機構を明らかにした。

第2回南方熊楠賞（人文の部）

谷川 健一 氏

長年在野にあつて研究を継続、民衆文化へ目を向け、柳田国男、折口信夫などの民俗学の成果と課題を多角的、総合的に研究。熊楠翁の視点にも論究した。民衆文化への視点を持ちながら、沖縄文化との比較研究をおこなった。

第3回南方熊楠賞（自然科学の部）

椿 啓介 氏

真菌類の研究で知られ、特に不完全菌類の研究に深く、その雑多な形質の中で分生子（胞子）形成様式という新分類基準を選び出し、分類体系を確立した。

第4回南方熊楠賞（人文の部）

國分 直一 氏

東アジアの民族文化の比較研究に取り組み、台湾などの各地の発掘調査で、多くの研究成果をあげた。

第5回南方熊楠賞（自然科学の部）

吉良 龍夫 氏

森林の生態系について観測と実験、数理的解析を加えて研究。科学的根拠を通して自然保護の大切さを訴えた。

第5回南方熊楠賞（人文の部）

鶴見 和子 氏

熊楠の博物学研究が地球規模で行われていたことに気づき、「地球志向の比較学」と題した論文を発表するなど、熊楠研究の新しい分野を切り拓いた。

第6回南方熊楠賞（自然科学の部）

竹内 郁夫 氏

細胞性粘菌を用いた発生生物学研究の第一人者。肉眼では見えず、生活サイクルなどが未解明の細胞性粘菌を日本で初めて研究材料として取り上げて研究の基礎を確立、発生生物学研究に多大な功績を残した。

第7回南方熊楠賞（人文の部）

川添 登 氏

建築評論家として活動する一方、在野の研究者として都市民を対象にした新しい民俗学の分野として「生活学」を提唱、体系化した。

第8回南方熊楠賞（自然科学の部）

四手井 綱英 氏

森林植生分布や里山林の起源、森林での水と養分の循環や動物の役割など、創意に富んだ研究を発表し、すぐれた研究者を育てた。

第9回南方熊楠賞（人文の部）

加藤 九祚 氏

シベリアや中央アジアなどのユーラシア内陸部全域にわたるフィールドワークをおこない、シベリアの民族に関する記録を古今東西の資料とつきあわせることによって、歴史民族学の新しい分野を開拓した。

第10回南方熊楠賞（人文の部）

上田 正昭 氏

アジア、特に東アジアを視野に入れたスケールの大きな日本古代史の研究家。

文献史学をベースとしながら、国文学、考古学、民俗学などの研究成果も取り入れ、古代社会を多面的に研究され、とくにヤマト王権成立から律令体制成立期の権力構造の分析や宗教と信仰などを主とし、またその他、その鋭い人権感覚から在日朝鮮・韓国人や被差別部落の問題にも積極的にかかわり、その問題意識から、従来の学統を総合する独自の方法で研究を大成されている。

第10回南方熊楠賞（自然科学の部）

日高 敏隆 氏

日本動物行動学のパイオニア。動物行動の生理学的・行動学的・社会学的基礎を確立した意義と貢献はきわめて大きいとの世界的評価を得ている。

第11回南方熊楠賞（自然科学の部）

青木 淳一 氏

土壌中にすむダニの仲間の研究に半生を捧げ、日本に知られるササラダニの約半数を新種として記載。また、ダニの研究を通して環境評価や環境診断の基準の確立、日本土壌動物学の確立に大きく貢献し、各界からきわめて高い評価を受けている。

第12回南方熊楠賞（人文の部）

櫻井 徳太郎 氏

青年期に柳田國男氏に師事し、その後民俗学諸分野にわたる幅広い研究を手がける。

殊に民俗宗教の分野では、民俗宗教の社会基盤を追究しての論究は学問的論争を起し、日本の学会でのシャーマニズム研究展開の軸となる業績が高く評価を得ている。

受賞に際し、「日本民俗文化の特質を抽出するには、少なくとも周辺民族との比較が必要で、南方学の成果を貪り吸収した」とのコメントを寄せられた。

第 13 回南方熊楠賞（自然科学の部）

本郷 次雄 氏

1945 年（昭和 20 年）当時、正確な同定が困難であったハラタケ目のキノコの種の特徴を正確に把握し、以来、今日まで 200 種を超える新種を記載するとともに、それを上回る数の日本新記録の新産種を報告しつづけてきた。また、その研究成果は「原色日本菌類図鑑」などで紹介され、これらの著作が日本産キノコ類の紹介に果たした功績は限りなく大きい。

第 14 回南方熊楠賞（人文の部）

佐々木 高明 氏

東南アジアや東アジアなどの諸国の現地調査を通し、日本人とそのアイデンティティの基礎にある日本文化の形成過程を、「稲作文化」をはじめ「照葉樹林文化」や「ナラ林文化」などの大きな文化類型を設定することにより、さまざまな形で跡づけられた。また、国立民族学博物館の創設に尽力され、その後も同館館長として民族学資料の収集と研究成果を、国内はもとより広く世界に発信し、日本における民族学研究の指導的役割を果たされた。

第 15 回南方熊楠賞（自然科学の部）

柴岡 弘郎 氏

植物生理学、細胞生物学が専門。高校生の時の「向日葵は本当に廻るのか」という素朴な疑問がきっかけで植物学の世界に進まれ、「植物はどのようにして生長するのか」という最も基本的な現象のメカニズムを研究され、生理活性物質と植物ホルモンの相互作用により制御されることを解明された。常に時代を先取りする世界的な研究業績によって植物の生長生理学分野を牽引されてこられた。

第 16 回南方熊楠賞（人文の部）

岩田 慶治 氏

1957 年以来四半世紀にわたり東南アジアの稲作民族を調査、日本との比較民族学研究を行い、アニミズムの再考を提唱された文化人類学者、人文地理学者。積年のアニミズム研究から、人間にとって必要な根源的な宗教感覚ないしは宗教性を、現代に甦らせた独創的思想家で、岩田学なる独自の学問体系を確立された。

第 17 回南方熊楠賞（自然科学の部）

伊藤 嘉昭 氏

生態学や社会生物学が始動しはじめた時代に、それらの学問をいち早く取り入れ、先駆的な業績を公表し、それを一般に広く紹介した。特に、沖縄のウリミバエ対策事業にかかわり、不妊化オスの放飼による防除計画を策定、実行し、沖縄でのウリミバエの根絶に成功された業績は、生態学が社会に貢献した例として世界的にも高い評価を受けている。また、生態学者の視点と純粋な正義感から、米軍によるベトナムでの枯葉剤使用に対する反対声明や沖縄やんばるの森の自然保護活動など、常に自然保護運動に尽くされた。

第 18 回南方熊楠賞（人文の部）

伊藤 幹治 氏

丹念なフィールドワークと膨大な文献による理論研究により、日本という国の民俗文化を集中的に研究する民俗学（フォクローア）と世界の諸民族の社会や文化の比較研究を行う民族学（エスノロジー）という二つのミンゾク学の統合の中から新しい日本人・日本文化論の構築された。

それは二つのミンゾク学の交流の原点に位置し、実地調査と文献研究によりその研究を展開させてきた南方熊楠の学問研究の特質と軌を一にするものと、高く評価された。

第 19 回南方熊楠賞（自然科学の部）

堀田 満 氏

草創期の植物分類学の気概と伝統を継承し続けている最後の植物学者の一人。

氏の植物分類学の研究はサトイモ科から始まり、数々の分類を手がけられるとともに植物の分布形成過程を究明した植物地理学上の功績は高く評価されている。人とイモの関係に関する民族植物学の視点からの論考は、照葉樹林文化論にも大きな影響を与えた。

また、採集された植物標本は約 7 万点に及び、これらの標本を背景にした植物の多様性に関する圧倒的な知識に基づき、現在もなお、植物をこよなく愛し、植物を求めて各地を精力的に歩きまわり、その保護に心血を注ぐ姿は、南方熊楠翁の足跡を偲ばせる。

第 20 回南方熊楠賞（人文の部）

山折 哲雄 氏

インドをはじめ、アジアや欧米の宗教思想史の研究を背景にして、日本の民俗文化や日本人の心の問題を広く深く考察し、その考究の深みの中から、日本人の心の問題の未来を見据えた上で、大きなスケールで情報を発信しようとしている。その研究は、欧米の思想を十分に咀嚼し、きわめて広い視野から、日本の民俗文化について考察を加え、日本人のもつ神々の問題や世界観の問題の解明に、旺盛な研究意欲をもって迫ろうとした南方熊楠の研究と通底するところが少なくない。

第 21 回南方熊楠賞（自然科学の部）

河野 昭一 氏

植物生態学、植物系統分類学の研究・教育に専念する傍ら、自ら「種生物学研究会」（のちに「種生物学会」に改称）を立ち上げ、数多くの研究者を育て上げるとともに、機関紙「種生物学研究」「Plant Species Biology」を刊行し、数多くの論文を発刊した。京都大学退官後は、日本生態学会自然保護専門委員会委員、NPO 法人地球環境大学理事長などとして、日本の自然、特に中池見湿原の保護、各地の国有林における不法伐採の摘発と保護等に大活躍している。その様子は神社合祀に反対し、活動した南方熊楠翁を髣髴とさせるものである。

第22回南方熊楠賞（人文の部）

森 浩一 氏

多くの著名な考古学者、歴史学者とも、若いころから交流を持ち、いろいろとアドバイスは受けてきたが、誰かを師と仰ぐことはせず、「森古代学」の探究を続けてきた。また、「考古学は地域に元気を与える学問でなければならない」と主張、研究成果を社会に還元するために労力を惜しむべきではないと、メディアへの対応をいとわないなど、調査研究の優れた業績だけでなく、執筆、講演、シンポジウムの企画立案など多彩な啓蒙活動や遺跡保存への働きかけは熊楠翁の生きざまに通じるものがある。

第23回南方熊楠賞（自然科学の部）

杉山 純多 氏

フィールドから分子にまで及ぶ幅広い研究を続け、菌類の多様な形態に着目するとともに、環境に応じて変幻自在に変化する菌類について、分子的解析手段を導入してその実体を明らかにし、菌類という生物の生き方の謎の解明に大きな前進をもたらした。このことは、熊楠翁の抱いていた菌類（変形菌類）の謎の解明につながるものである。

第24回南方熊楠賞（人文の部）

石毛 直道 氏

食文化研究のパイオニアで、これまで学術的な研究対象となりにくかった「料理」を、それを創作し伝えている人たちの歴史、習俗、暮らし、自然環境などを網羅した生活体系の一つの「食文化」として捉え、人類史的な視野での比較文明論の主要素であることを提示した。未知の食文化を求めて世界各地を訪れ、豊富なデータを集め続けた学問への姿勢は、身近に生息する粘菌を探し求め、世界的学者になった熊楠翁に通じるものがある。

第25回南方熊楠賞（自然科学の部）

井上 勲 氏

学生時代から一貫して、微細藻類の系統分類学的研究を行い、また「藻類画像データ」をインターネット上に公開して、多様な藻類の世界についての新しい知識を学界・社会に普及させるなど、学術的意義ばかりでなく、啓蒙的な価値の高い研究も行っている。細胞生物学から分類学に及ぶ幅広い研究により、現代的な博物学ともいえる藻類学の分野を推進した業績は顕著であり、南方熊楠翁の博物学を髣髴とさせるものである。

第26回南方熊楠賞（人文の部）

中沢 新一 氏

宗教学を足掛かりとして、人類学や民俗学のフィールドにも歩みを進め、現在は対称性人類学と呼称される領域を提示しており、従来の学問の枠組みにとらわれない研究成果を実現している。特に、独自のアート感覚あふれるフィールドワークの手法を用いる「アースダイバー」は、注目すべき取り組みである。思想アートとでも評すべきこの取り組みは、現代人にとって新しい知見と感性を切り開く可能性をもっていると思われる。中沢氏の独創性とトリックスター的な役割は、人文学のみならず、多くの分野に影響を与えた。

第 27 回南方熊楠賞（自然科学の部）

加藤 真 氏

学生時代から一貫して、昆虫と植物など多様な生物が複雑に絡み合う共生関係を解き明かし、生態学研究を大きく発展させている。さらに、森林、干潟、湿地など様々な生態系が、多様な共生関係で成り立っていることをつまびらかにすることで、生物多様性、生態系の保全にも貢献。また、植物と昆虫の共生関係だけでなく、森林、湿地、河川、干潟、藻場など様々な生態系で、多様な生物の種間関係を調べ、学術的な意義だけでなく、保全にも役立つ情報発信を続けてきた。

第 28 回南方熊楠賞（人文の部）

櫻井 治男 氏

神社合祀問題について、三重県下を主なフィールドワークの対象として「行政村」単位での合祀の事情を具体的に明らかにするとともに、従前ほとんど注目されていなかった、合祀後の地域社会の様相や祭礼行事の持続と変容の内容を解明することに独自の視点を据えて、その結論を導き出している。

南方熊楠特別賞 第 1 回時

長谷川 興蔵 氏

「南方熊楠選集」・「南方熊楠日記」の編集と校訂に尽力し、南方熊楠研究の発展に大きく寄与。

南方熊楠特別賞 第 1 回時

小林 義雄 氏

南方熊楠翁の菌類彩色図や標本を検討し、「南方熊楠菌誌」と「南方熊楠菌類彩色図譜百選」の刊行に貢献。

南方熊楠特別賞 第 7 回時

カルメン・ブラッカー 氏

英国民俗学会長の就任講演で南方熊楠の研究を紹介するなど、南方学の研究と海外での紹介に大きく貢献。

南方熊楠功労賞 第 11 回時

樋口 源一郎 氏

日本における科学映画の第一人者で、国内外の科学映画祭において数々の賞を受賞。90 歳をゆうに越えた今日でも、映画製作の第一線で活躍され、特にこの 20 年間ほどは、粘菌やキノコの生態、生活史の映像化に力を入れられている。

南方熊楠特別賞 第12回時

神坂 次郎 氏

自ら現地に足を運び調査研究された資料に基づき、熊楠翁の人物像を見事に浮き彫りにし、仕上げた数々の熊楠翁をテーマにした伝記小説を通じ「知の巨人・南方熊楠」の名を日本全国に知らしめた業績が高く評価される。

特に、その執筆活動及び卓越した作品の中でも、「縛られた巨人 南方熊楠の生涯 (S62)」は熊楠ブームの火付け役となる等、熊楠翁顕彰に果たした役割は大きい。

南方熊楠特別賞 第13回時

後藤 伸 氏

文系の視点による翁の業績への研究が多数を占めていたなか、自然科学者の視点からその研究に取り組み、自らのフィールドワークを通じて、翁が行った神島を始めとする南紀の植物生態研究を再評価し、また翁が収集した標本類の整理・研究にも多大な貢献をされた。

南方熊楠特別賞 第14回時

飯倉 照平 氏

第1回南方熊楠特別賞受賞者 故 長谷川興蔵氏とともに平凡社刊『南方熊楠全集』の刊行に携わられるとともに、『南方熊楠—森羅万象を見つめた少年』などの著書をもって熊楠翁の業績、人となりを広く世に紹介した。

また、翁の残した膨大な資料の調査を通して「南方熊楠の基礎的研究」を進めている南方熊楠資料研究会の会長として会をまとめられ、その研究業績を同会編の『熊楠研究』に報告し続けるなど、着実な成果をあげている。

南方熊楠特別賞 第23回時

中瀬 喜陽 氏

今日のように進んだ熊楠研究の基礎をつくったパイオニアの一人であり、長年地元を対象にした地域文化の研究に力を傾注してきた。翁が残した書簡や日記等の膨大な資料を根気強く解読し、また翁を知る人への聞き取りを通して、熊楠研究に次々と新資料を加えた。氏はその成果を単に著作としてまとめるだけでなく、市民や研究者を対象に熊楠自筆資料の解読講座を開き、後進の指導にも取り組んできた。さらに、研究者としての活動だけでなく、翁の顕彰事業推進にも大きな役割を果たした。

南方熊楠特別賞 第25回時

萩原 博光 氏

熊楠翁の収集した変形菌類（粘菌類）やきのこ類の多数の標本の整理やその難解な記載資料等の解読・公表に尽力するとともに、その業績を広く社会に発信し、翁の卓越した科学者としての側面を世に知らしめた。

【第29回南方熊楠賞受賞者】

馬渡 駿介 氏

北海道大学名誉教授

専攻：無脊椎動物分類学

北海道在住



●選考理由

一貫して無脊椎動物の種分類学に関する研究に邁進し、特に苔虫動物門に属し淡水から海水に生息する、コケムシと呼ばれる群体性の固着生物の研究に注力。多くの新種を含む日本産コケムシ類の種類相を明らかにした。また、世界中のコケムシ標本との比較研究も行い、いくつかの科・属・種についての分類体系に改訂を加えた。広範な無脊椎動物についてフィールドにおける丹念な調査・研究に基づき種を記載・分類するという姿勢は、熊楠翁の精神に通じるものがある。

●生年月日 1946（昭和21）年10月6日（72歳）

●略 歴

- 1946年10月 東京都生まれ
- 1969年3月 北海道大学理学部生物学科卒業
- 1971年3月 北海道大学大学院理学研究科動物学専攻修士課程修了
- 1974年3月 北海道大学大学院理学研究科動物学専攻博士課程修了
理学博士取得
- 1975年4月 日本大学医学部 助手
- 1980年11月 日本大学医学部 講師
- 1982年4月 北海道大学理学部 助教授
- 1988年4月 北海道大学理学部 教授
- 2007年4月 北海道大学総合博物館館長
- 2010年3月 北海道大学定年退職 北海道大学名誉教授 現在に至る